私立全寮制御堂学園物語　巻1

□登場人物□

■神坂（かみさか）　純也（じゅんや）（○年生）
学園の新入生。ごく普通の元気なサッカー少年。父親が『御堂』の社員であり、半ば強制的に学園に編入させられた。そこでの学校生活は入学前の不安をはるかに上回る想像を絶する世界となる。

■平田（ひらた）　裕（ゆたか）（○年生）
純也と同じ小学校にいた友達。同じく父親が『御堂』の社員で、純也と同時に学園に編入させられる。まじめで勉強はよくできる。大人しい性格。

■岡本（おかもと）　将大（まさひろ）（○年生）
純也と裕のクラスメイト。太って円満な外見通りおっとりのんびりしているように見えるが、実は頭の回転が速く、しっかりしてる面もある。

■清家（せいけ）　秀一（しゅういち）（高○）
学園の理事の息子であり、学園生徒全体に闇の支配力を発揮。

■紅林（くればやし）　毅（たけし）（○3）
秀一の配下№1。秀一の卒業後の跡を継ぐと目されている。体格がよく、大人並みの腕力が自慢である。柔道部。

■村原（むらはら）　秋信（あきのぶ）（高○）

SAMPLE

サッカー部。長身、短髪・長身で表面的には爽やかなスポーツ少年の顔を持つが、裏では清家の下で、歪んだ欲望を満たしている。

■宮下（みやした）　勝也（かつや）（〇3）
清家の配下で紅林の同級生。色白で眼鏡をかけ、やや太めの大人しそうな外見を持つ。写真とパソコンが趣味で、典型的なオタク。

■涌坂（わくさか）　純一郎（じゅんいちろう）（34）
学園の理科教師。逞しい巨体の持ち主。裏で秀一とつながって自らの欲望を充足させている。

■猪瀬（いのせ）　幸仁（こうじん）（29）
いのせ　こうじん　美術教師で美術部顧問。飄々としているが、何かしら秘密を抱えていると思われる。

SAMPLE

序章　予兆

神坂純也は、車窓を開け、何があるというわけでもない後方ばかりを見ていた。春の薫風が、砂埃とともに、彼の刈りたてのスポーツ刈りの頭を撫でかすめ、通り過ぎていった。

四月八日。今日は、彼の入学式だった。といっても、彼は今日から、新〇年生なのである。

「見えてきたぞ。あれだよ、純。お前が通う学校は」

山道を登るクリーム色のセダン。純也が気乗りしないままに前方に視線を移すと、小高いところに、赤煉瓦の城塞のような建物が見えていた。純也の心情を映してか、それはさながら、重苦しい刑務所のようにすら感じられたのである。

首都圏から少しはずれた某県。自然の恵み豊かな山林の中に、その学園はひっそりと息づいていた。私立全寮制御堂学園。設立者は大企業『総合商社　御堂』の幹部であり、そこに通う子弟もまた、同社社員や、関連会社等の社員の子息でそのほとんどが占められる。その特殊性としては、〇学校〇年生からの編入を基本とし、中、高を合わせて八年間の一貫教育を原則としている点である。男子部と女子部があり、それぞれが完全に隔絶され、独立している。赤い城塞は、学園を外界から隔てるとともに、同じ学園の男子部と女子部をも、完全に隔絶していた。

純也の父親も『御堂』の社員であり、それ故に、親の意向で〇年生から純也もこの学園に入学することになったのである。ごく普通の〇学校生活を送っていた純也にとって、他の子と同じように進級できず、今まで一緒に過ごした級友とも別れて、新しい生活に入るなどということに、気が進むはずはなかった。父親はエリートコースのように云うが、それこそ、まだ〇年生になろうとするばかりの純也には、何の興味もないことだった。幼なじみの友達と、サッカーができなくなることの方が、彼には比較にならない痛手だったのだ。学園の内情について、彼はほとんど聞かされていなかったが、「エリートコース」などと聞かされるだけで、勉強が重荷になりそうで、気が沈む一方だった。

舗装の傷んだつづら折れに入ると、学園は目の前だった。敷地に入ると、豪奢な石畳と芝生が敷かれており、「城壁」を目の前にすれば、それは四階建ての校舎を完全に覆い隠すほどに高かった。幅広な門は、今日は大きく開かれている。《御入学おめでとうございます》の横断幕は、生徒会の手製らしい。吹奏楽の演奏が、遠くに聞こえる。

純也は、ほんの少しだけ、新しい生活に希望を抱いた。

だが、その希望は、ほんのわずかな時を経て、打ち砕かれることになる。そして黒々とした地獄の穴が、静かに口を開けて、彼と彼らを待ち受けていた。

第一章　入学式

「純ちゃん！」

背後から明るいボーイソプラノを聞かされ、純也は弾かれたように振り返る。

そこには、幼なじみの平田裕の顔があった。濃紺のブレザーに半ズボン。御堂学園の〇学部の制服だ。無論、純也もそれを身につけている。身長は少しだけ純也が上で、彼の浅黒く健康にやけ、〇学生なりにサッカーで鍛えられた頑強そうな素足と、色白でほっそりして、やや少年的なやわらかな曲線を残す裕の素足とは、好対照であった。

裕は愛嬌のある丸顔の、満面に笑顔を浮かべている。釣られて純也の顔からも、浮かない表情が消えた。

「純ちゃんと同じクラスだったよ！」

「えっ！　そんなのどこに……」

「こっちこっち！」

裕は純也の手を引き、式が行われる体育館前の、掲示板の前に連れていった。模造紙が何枚か

SAMPLE

貼られており、クラス分けの一覧が墨字で書かれていた。純也と裕は同じA組だ。他に知る名前はない。

純也も裕と同じくらい嬉しかった。未知の孤島に乗り出すのに、共に漕ぎ出す仲間が一人いるのといないのとでは、天と地ほどの差がある。

純也と裕は〇学校の一年生からずっと同じクラスだった。裕の父親もまた、御堂の社員だった。純也の父親は、彼が裕と仲良くすることを、あまり快く思っていなかったようだ。つまり、社内での《格》が純也の父親の方が上であったからなのだが……。しかし純也にはそんなことは関係なかった。裕は、勉強はよくできたが物云わずで大人しく、ともすればいじめられたり、モタモタして仲間から置き去りにされたりすることが多かった。純也はそんな裕を守るのが自分の役割だと思っていた。しかし今、未知の世界に放り込まれてみれば、これほど心休まる、頼りになる相棒もなかった。

「入学式、始まっちゃうね！」

裕に手を引かれて、純也は他の少年達の群れに紛れ、体育館に吸い込まれていく。

そんな少年達の群れを、一種異様な視線で見送る、一団のこれまた《少年》達がいた。

リーダー格は高〇の、清家秀一。すらりとした長身。端正な顔立ちに、鋭い印象を与える眉。小振りな眼鏡の奥に、《底知れぬ》笑みをたたえている。濃紺のスーツにネクタイ。高等部の制服をスタイリッシュに着こなす。

そのそばに控えるのが、〇三の紅林毅。胴回り百センチ、柔道体型に、年齢よりも年かさに見える、いかつい頭を載せている。口元にいやらしげな笑み。〇学部の制服である、黒の詰め襟。

高〇の村原秋信は短髪の一見爽やかなスポーツマンタイプ。サッカー部のエースで、長身に鍛えられた下半身。そして、紅林の同級の宮下勝也。メガネをかけた小太りで顔色の悪い少年だ。

「毎年、この時期は楽しみだよな」

紅林は、目は清家を見ながらも、声は他の二人にかけている。

「そうだよな、新しい獲物がどっと入ってくるから」

年下の紅林に、調子を合わせているのは村原だった。

SAMPLE

「清家さん、もう誰か……」
どことなくおどおどとした態度の宮下は、途中で言葉を飲み込んだ。清家の唇が動いた気がしたからだ。
「あの二人、仲が良さそうだね」
「え、あ、誰？　ああ」
口ごもる宮下の頭を軽く押さえ、紅林が低い声で云う。
「あのスポーツ刈りと、丸顔ぼっちゃん刈りですね。どっちから行きます？」
「ゆっくり考えよう。A組らしいな。名前を確かめておいてくれ。……おっと、式が始まってしまう」

第二章　異次元

入学式のあの日の不安が全く杞憂と思えるほどに、純也の学校生活は順調だった。ただ一つのことをのぞいて……。
持ち前の活発さで親しく話せる友人もすぐにでき、サッカー部に体験入部もした。他にも数人の入部希望者がいたが、とにかくスタート時点では自分に最もアドバンテージがありそうなのにもいい気分になった。勉強については……とにかくついていければいいや、という目標である限り、それほどの重荷でもなかった。
夜は寮に入る。四畳ほどの仕切られた空間に学習机とベッドが一つ。これが一人のスペースだ。あいにく部屋ではなく、《ブース》といったイメージで鍵のかかる戸はついていない。それでも、それなりのプライバシーは保たれた。高校生になると、一人一間の部屋が与えられるらしい。
ただ一つのこと、それは裕のことだった。学校が始まって一週間、どこへ行くのも純也につい

SAMPLE

てきた彼の様子が、急変した。話しかけても生返事、昼休みに一緒にグランドに行こうと誘ってもついて来ず、純也は仕方なしに彼を置いて、他の子とともにグランドに行くことになった。彼のことが気になりながらも、純也は他の新しい刺激の引力に負けて、彼を十分に顧みなかった。それを責めるのは純也には酷なことであったろう……。ホームシックだろう、時間が解決してくれるよ、そう思いながら、彼の変化を見過ごしてきた。

「ゆう坊……」

五月の連休明けだ。昨日純也は、まんじりともせず考えた。放っておけない。話しかけないと……。そう思いながら、声をかけたのは夕食後の自由時間になってからだった。

裕の返事はない。そのまま席を立とうとする。

「おい！」

純也は、やや乱暴に裕の肩を押さえて、座らせる。そのまま、激しい口調になるのをこらえて、彼は優しく訊ねる。

「学校、楽しくない？」

裕は、うつむき黙って首を振る。

「家に帰りたいとか思うの？」

やはり、黙って首を振るだけだ。

「俺たち、逃げ出すわけに行かないだろう？　だったら、ここでどうしたら楽しく過ごせるか考えなくちゃ。いつまでもくよくよしてたって……」

「……違うの」

「え？」

「違うんの、そんなんじゃないの」

声が震えている。涙がポタポタと机にしたたり落ちた。

「どうしたんだよ。云ってくれよ。違うって何なんだよ！」

純也は裕の肩を揺すりながら、強く訊く。苛立つように。

「ごめん、純ちゃん……。僕もう行かないと」

SAMPLE

「ちょ、ちょっと待てったら。ゆう坊！」

夜。純也のブースの壁をノックする音。振り向くとそこには、相撲取りのような太った体に、人の良さそうな円満な顔をした、クラスメイトの岡本将大がいた。

「純ちゃ～ん。ゆう坊、今出てったよ。約束だから知らせに来たけど、規則違反だからあんまりうろちょろしない方が……」

「ありがとっ！」

のんびりした将大の言葉を聞くか聞かずのうちに、純也はブースを飛び出していた。

「話は最後まで……。B棟の方だよ～」

B棟は特別教室棟だ。音楽室、家庭科室、理科室などの他に、各教科の資料室がある。夜は施錠されてるって聞いたけど……。

派手な足音を立てないようにしながらも、純也は一目散に駈けた。裕が昼間ぼんやりしているのは、精神的な問題だけじゃなくて、寝不足もあるんじゃないかと思っていた。夜、何をしているのか……。純也のブースと裕のブースは離れていたが、純也はあきらめなかった。裕の隣のブースの将大に、出入りがあったら知らせてくれるように頼んだのだ。

B棟は暗闇だ。非常口の案内灯くらいしか、電灯はついていない。だが月明かりは射しているし、全く歩けないという暗さではなかった。いよいよ足音を殺し、二階へ。いた！

夜に体操服で、幽霊のように歩く裕の姿があった。そして、その先の一室から、明かりが漏れている。あれは……理科室だ。裕はあそこに向かっている。理科室に裕の姿が吸い込まれるのを見ると、純也は蟹のように壁際を進み、裕が入ったのとは反対側のドアに体を密着させ、中を覗く。

そこでは純也の理解を超えたショーが、信じがたい光景が、展開されていた。

（中略）

SAMPLE

（何なの、これ）
裕は後ずさった。
「紹介するよ。〇学一年の田嶋伸行君」
清家が眼鏡の奥から視線でわずかに合図すると、紅林は股の間の頭の髪をつかみ、乱暴に引き離した。首輪の鎖ががちゃりと音をたてる。紅潮し、涙ぐみ、唾液にまみれ、口の端に陰毛のついた顔が、股の間から現れた。口から唾液がぼたぼたとこぼれ、今まで息をこらえていたかのような「うぷっ」という声が漏れた。日常ならば、二重の目をした、〇一にしては幼く愛嬌のある顔であるはずのそれは、醜く汚され、苦痛に歪んでいた。
（逃げなきゃ）
しかしさらに後ずさる裕の両腕が、何者かにがっちりとつかまれた。
村原と、宮下だった。
「ああっ……」
「少し待ってくれないか。君の番はもうすぐだから」
清家の落ち着いた声の後に、残りの三人の哄笑が続いた。
「もう少し近くにおいで。何を遠慮してるんだい」
村原と宮下は、嫌がる裕の両脇をかかえ、宙に浮かして、《その現場》の近くに引きずっていった。裕は、暴れて逆らうことなどできなかった。気が動転して、怯えて、目をそらすこともできない。
紅林は、待ちこがれたように哀れな少年の髪をぐいと引く。紅林の股の間のグロテスクなものが、裕の視界に入った。大人の、それが、今のように大きく堅く怒張している場面など、裕は見たことがなかった。四年生の教室では、性的な関心を持ち始めて《エロ本》など持ち出すのは、まだごく限られた子に過ぎなかった。
てらてらと濡れ、亀頭の露出したそれを、田嶋という少年は一心にしゃぶっている。時々、紅林は首輪から伸びた鎖をぐいと引く。その度に、「おええっ」というような苦痛の声が、少年の

SAMPLE

喉から漏れる。その時、それを斜めに見下ろす清家の口元に、かすかな笑みがすっと浮かんで消える。

裕は、心臓がせりあがってきそうだった。にも関わらず、目をそらすことはできない。そして、股間に、むずむずとする感覚を覚え始めていた。

「おっと、いくぜ、そらっ」

紅林は腰を浮かせ、少年の口から性器を抜き去ると、そこから白濁の液をこれでもかと云うほど発射し、少年の顔面と床を汚した。すえた匂いが広がる。

少年は命ぜられるままに紅林の萎えた性器を舌で清め、口に残る陰毛に顔をしかめる。床にこぼれた精液を舐めるのには、さすがに抵抗があって、哀訴するように紅林の野卑な顔を見あげたか、頭を素足で踏みつけられ、嘔気に耐えながら床をも舐めた。そして、ただ黙って服を着て、俯いて出て行った。泣くことすらせず、ちらりと裕の方を見て。

「さって平田君。お待ちかね、順番が回ってきたよ」

ズボンのチャックを上げながら、紅林がよく響く大声で云う。清家が小声で紅林に何か指示を出す。紅林は宮下と村原に耳打ちし、裕を押さえる役を一人で引き受ける。フリーになった二人は、素早い動きで《ステージ》を整えた。

長机を二つ並べ、紅林が裕の体を軽々とその上に持ち上げる。

「やだ、助けて！」

裕はようやく、抵抗をしようとするが、紅林の並の成人以上の膂力の前には、全くの無力だった。

両腕を押さえる役を村原が代わり、紅林は両足を。そして仰向けの大の字で、裕は二つの長机の上に、展翅板の上の昆虫のように固定された。

清家が、ゆっくりと裕の顔をのぞき込む。

「いやーーーッ！」

SAMPLE

裕の甲高い悲鳴を、もし聞く者があったとしても、助けに来る者はいない。

「やめて、離してッ」

裕は両手両足に渾身の力を込めるが、二人の〇校生の腕力でがっちりと押さえ込まれ、わずかに机をがたつかせるだけだった。

清家は微笑を浮かべたまま、鼻息がかかる程の間近にまで、裕に顔を近づけた。裕は蛇に睨まれた蛙のごとく、声すら出せなくなってしまう。

「どうした、もっと泣かないのかい？」

清家はその端正な口から、裕の鼻にふっと息を吹きかけた。

「泣けば、誰か助けに来てくれるかもしれないよ。そうでなければ、どうなるか……」

清家は言葉を途中で切り、唐突に噛みつくように、裕の口にくちづけした。

（……！）

息ができない。そして、必死に閉じる唇を割って舌が侵入してくる。

「むぐっ……うう」

裕の常から潤んで見える大きな瞳から、ぼろぼろと大粒の涙がこぼれる。自分は一体どうなるのか。先程の田嶋とかいう上級生の悲しげな瞳が裕の脳裏をかすめた。

清家が唇を離した。

「ぷはっ……」

「泣いているね。ふふ……。お楽しみはこれからなのに」

「うがっ」

裕は思わず全身を硬直させ仰け反った。清家がズボンの上から、睾丸を思い切りつかんだのだ。

「痛いぃ……あ、あ……」

グリグリと睾丸を圧迫され、裕はうめく。　清家は、睾丸を弄びながら、もう一方の手で、裕のカッターシャツのボタンを、下から順番にはずしていく。わざと緩慢な動作で、裕の表情を楽しみながら。やがてすべてのボタンがはずされ、カッターシャツの前がはだけられると、ズボン

SAMPLE

に押し込まれたランニングシャツのすそを引っ張り出す。腹部の白い素肌が露出する。
「や……めて……」
震える小声でしか、裕は抗弁できない。
「何をだ？　これ・を・か？」
清家は睾丸を握る指に、声に合わせて思いきり力を入れた。
「いやーーーッ」
痛みと何かが下腹にせりあがってくるような不快感に、裕は再び手足をばたつかせ抵抗する。
清家はその悲鳴を聞くと、いったん手を止め、すっと裕の体を離す。そして紅林に短い言葉で何か命令すると、次に宮下の方を向く。
清家の責めを尻目に宮下が何をしていたかというと、ビデオカメラの準備だった。機械ものをいじる時の彼はひときわいきいきとしている。
「クレちんいいよ。脱がしちまいな」
紅林はそのごつごつした手で、裕の半ズボンに手をかける。裕は解放された両足をばたつかせて暴れた。宮下は鼻歌まじりにカメラを構えて、その様子を手慣れた手つきで撮影していた。
あっけなく裕の半ズボンは抜き取られ、白いブリーフに、カッターシャツははだけ、白いシャツが胸のあたりまでたくし上げられた姿で、裕はじっくりと撮影された。
「いっちゃいますよコレも」
背後にいる清家に紅林が了解を求める。聞き取りにくい声で後ろを向いたままの彼が「ああ」と言うと、紅林はブリーフを乱暴に膝まで下ろした。
幼児体型を残した腹部の曲線の下。裕の下半身が露わにされる。ペニスは小さく縮んでいた。皮は完全にかぶっていて、無毛だった。
「おう、かわいいねえ」
紅林がそのペニスをぴんと人差し指で弾くと、ひときわ大きな声で裕は泣き叫んだ。
「やめてぇーーーッ」
清家は、左手に手術用のような薄手のゴム手袋をはめながら、ゆっくりと裕の方に戻ってきた。

SAMPLE

「そろそろ悲鳴も聞き飽きたな。そいつで塞いでやるといい」
口元を歪めた清家の言葉に、紅林は、抜き取ったブリーフを丸め、裕の口に押しつけた。
「むぐぐッ……」
鼻をつままれると、あらがうすべもなく裕の口は開いて、丸められた彼自身のブリーフで完全に塞がれてしまった。
撮影を続けていた宮下を手で制すると、宮下はさっとカメラを下ろした。そして黙って裕を見下ろす清家。この静かな間が、裕を怯えさせた。哀願するように、清家の冷たい目を見つめる。

（中略）

「裕君、君の素晴らしい日々が始まるよ。約束しよう。今日がその始まり。ほんの小手調べのようなものさ」
清家は、ゆっくりと指を抜き、手袋を抜き去って捨てる。
宮下。いいポーズで写真を二、三枚撮ったら、帰してやれ。紅林、行くぞ」
「俺も残りますよ」
「馬鹿云え、お前僕がいなくなったらこいつを犯すだろ。お前の下半身がそう云ってる」
清家は笑った。
「だってここまでやっておあずけはないですよ」
紅林は少し口をとがらせて抗弁する。
「見たところこの子は繊細そうだからな。無茶をやったら早々に壊れてしまう。本丸は神坂君の予定ではあるが、この子もなかなかいい。じっくりと楽しみたいからな。お前も楽しみは次回に取っておけ」
紅林はむっとした顔で少しうなると、また下品な笑みを浮かべ、机に横たわる裕に言葉を浴びせる。
「この次は、もっと気持ちいいことしてやるからな。じゃあな」

SAMPLE

そう云って、清家よりも先に、生徒会室を出て行った。

清家が消えると、宮下は嬉しそうに一眼レフのデジカメを手に取り、村原に注文を出しながら写真を撮りまくった。二、三枚と云うよりは二、三十枚である。裕には抵抗する気力も体力も残ってはおらず、宮下と村原が出て行った後でさえ、下半身を露出したまましばし呆然と床に座り込んでいた。

裕が自分の唾液でずぶ濡れのブリーフをはき直し、半ズボンをその上に穿いて、生徒会室を後にした頃には夜の九時がせまっており、校舎は暗く、しんしんと静まりかえっていた。

本編につづく

SAMPLE